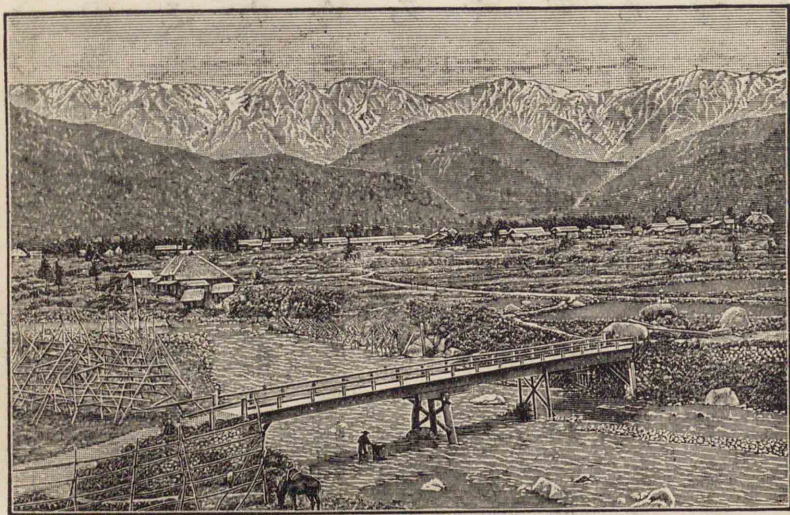


「大丈夫ですか。一つの大きな岩を越すと、人夫は立ちどまつて、後に續いた横山君をじつと見ながら云つた。横山君は無事に岩をめぐつた。私はその後^{あと}に續いた。岩に抱きついた私は、今、右足を進めると、左足を大きく、岩に觸れないやうにと加減して移した。それでも左足の股のところ^{ところ}が岩に觸れた。ちよつと觸れたと自分では感じたが、そこに物の裂ける音がして、そして股に痛みを覺えた。岩を過ぎて見ると、私のズボンも、ズボン下も、刃物で切つたやうに裂けて、そして股はかなり長く切られて、紅く血が滲み出してゐた。

「手袋をはめて居なからうものなら、とても歩かれない。」と

Tent テント



ス プ ル ア 本 日

云つて、私は木綿の厚い手袋を見た。僅かのおひだ岩に縫つた爲に、その手袋は可なりに擦れてゐた。頂上へ着くと、すぐ眼の下の方とも小高くなつた一つの窪地にもうテントを張つて、焚火を始めてゐた。狭い場所に三つのテントと、三つの煙を立てながら燃えてゐる焚火とが、

藥師岳
越中新川郡に
峙つ山
標高三千メー
トル

さびしくも親しいものに見えた。
露營地に續いて西に土手の高さを持つてゐるところに登ると、私は前面に雄大な落ちついた、そして素朴の感を持つた、いはゞ巨人が胡座をかいて休んでゐるやうな山を見た。今朝、遠く一面を見た藥師岳である。赤牛はもう黒岳の後ろに隠れてしまつて、今はそちらへ眼を放つて、一面を見るやうになつてしまつてゐた。

私の立つてゐるところは山腹ではあるが、傾斜は極めてゆるやかで、丸々として、ところどころに高山植物の白い花を持つてゐた。そして谷は深くはないやうに見えた。その谷の、やゝ南寄りの展けたところに、私は一つの奇妙な山を見

おろした。それは山とは云つても、小さな山を横斷して一劃の平地としたやうなものである。自然にあるものとしては如何にも人工的な感を持つてゐて、第一印象としては奇妙と感ぜざるを得ないものである。が、暫く見てゐると、それが何かの形に似てゐると思つた。が、何であるかは思ひ得なかつた。後になつて、それは「蜘蛛の平」といふのだと聞いて、さう云へばそんな形にも見えると思つた。

露營地の南の方は、極めてゆるやかな傾斜をもつて高まつて、遠く何處までも續いてゐるやうに見えた。そちらには偃松が繁く生えてゐるのが見えた。

北の空には、峰つゞきに、一つの高い峰が聳えてゐた。この

山の岩は茶褐色であるのに、そちらは黒いのが異様に感じられた。黒岳といつて、峰には水晶の小さいのが少なからずあると聞いた。

今まで見えなかつた同行の堀君は、焚火の側へあらはれて來た。靜かな微笑を浮べながら、

「黒岳へ行つて來ましたよ」と云つて、上着のかくしから細かい水晶を掴み出して、手を擴げて見せた。つまらない水晶のやうに見えた。

「もつと大きいのはないんですか。」
「あるかも知れないが、岩をかく道具がないから分りません。」

「どつさりあるんですか。」

「え。」と堀君は微笑してうなづいた。

居合せた小林君は、

「僕も行つて見て來よう。」と好奇心をそゝられたやうに云つた。そして私たちの顔を「どうです」と誘ふやうに見た。

疲労は私たちの好奇心を封じてしまつてゐた。私は黙つてゐた。小林君の姿が見えなくなつた。

横山君は寫眞機を持出して、レンズを彼方此方に向けてゐた。

「藥師を背景に、一枚いゝのをとつてくれないか。」
「光線がどうか知ら。」横山君は胸にあてた小さな寫眞機

を覗き込みながらいつた。

こゝへ着いた時には、まだ日が可なり高く、岩も草も光つてゐた。暮れるに遅い夏の日が、いつの間にか暮れかゝつて、眼をとめて見ると、光は空だけのものとなつてゐる。そしてその空も青ざめて、晝の盛りの光で見る時の活きゝした力を失つてしまつてゐた。

露营地へ着いて寝るまでの間は、即ちじつとして山に向つてゐられる間は、一日の中で一番山嶽氣分の濃くなる時である。危険な道を歩いてゐる時は、山は足の下に縮まつて來て、山と足の下とは一つものになつてゐる。仰いで見廻す山々は、皆偉力を示してはゐるが、此方の張切つた心には

その偉力は恐しいものとはならず、むしろ美しく耀かしい誘惑的なものに見えて來た。それがじつと動かずに見てゐると、山は限なく大きく、靜かに、その反對に自分は極めて無力なものとなつて來る。そこには寂しさに似た感がある。その寂しさが、單なる寂しさでなく、清らかさを持つた寂しさなので、一種の快さとなつて受け入れられるのである。

夜は今、薄靄のやうにあたりに漂つて來た。テントの側で人夫の焚いてゐる火は、次第に赤い色を加へて來た。見ると、人夫は夕飯を食べる支度をしてゐる。

その時である、何處かへ遊びに行つてゐた關西の學生の一

行は、揃つて騒ぎながら、南の方の偃松帯の方から近づいて来た。



鳥

雷

一番大きな青年が、手に何かを握つてゐる。外のものはそれを珍しがつて、覗いて見ようとする。大きな青年は手を差し上げて見せ惜しむやうにしてゐる。それが影繪のやうに見えながら、私たちの側まで来た。

「何です。」と私は大きな青年に訊いた。
「雷鳥の雛です。」

「いけませんよ。」と私は強く首を振つて、そのことの悪い意を示した。「叱られますよ。」
本當は、私は、叱られるかどうかを知らなかつた。すぐに感じたのは、何れはおもちやにして殺してしまふにきまつてゐる、それがかはいさうだと思つただけであつた。
「いけませんか。」と、その青年は關西訛りで慌てゝ訊いた。その眼には呆れた色が無邪氣な色と一緒になつて現れた。
「どうしたらいいでせう。」
「どうつて、しかたがないな。放しておきなさいよ。」
青年は、何處へ放したらいいだらうといったやうに、まごまごして、手に握つてゐる雛を眺めた。

横山君は側から、

「そこいらに置けばいいでせう。あの石の上がいい。かはいさうに。」

と云つた。青年は云はれた通りに、少し先の低い草の中に高く見える、一つの石の上に置いて來た。

焚火を囲んだ時には、案内者は一團の者の氣を兼ねながらも、しかし、しつかりした口調で、雷鳥を捕つてはならないこと、分らない積りでも何うかして分つて、案内者が迷惑することを話して聞かせた。

學生連中は黙つて、困つた顔をしてゐた。

「あの雛はどうなるだらう、死にやしないか知ら。」

私は氣にして云つた。人夫の一人は、

「親鳥が捜しに來ますよ、鳴き聲で分るんです」と云つた。

食事が済んで、そろ／＼寢ようといふ時であつた。山はすつかり暗くなつてしまつて、空は青黒く高くなつた。赤く燃える生木の焚火を囲んで、私たちは沈黙がちになつてゐた。あたりには何の音もなかつた。

「びよ、びよ」といふ聲が遠く微かに聞えた。その聲はみんなの耳に入つた。

「雷鳥の親が捜しに來た。」と一人がいつた。

みんなそちらに耳を集めた。

「びよ、びよ」といふ聲は續いて起つて、そして闇の中をさま

よつてゐるのが聞える。近くなるかと聞くと、遠くなつて行つた。

「雛が返事をするといふんだ。教へてやりやうもない。私たちはさう云つて、親鳥をかはいさうにも思ひ、又雛の居場所の分らないのをもどかしがりました。今に分るだらう。」とも云つたが、それは自分を慰めるに過ぎないといふ氣がした。翌朝、眼が覺めて、テントから這ひ出すと、私たちは雛鳥を置いた石のところへ行つて見た。雛はゐなかつた。その邊を見廻したが、何處にもその姿は見えなかつた。寒い、寒いと、みんな肩を窄めた。

「水が氷つてゐた、昨日解けたのが、氷つてしまつた。」

雪溪へ顔を洗ひに行つたものが、さう云つて歸つて來た。堀君はサックの中から寒暖計を出して見た。

「東京の酷寒ですね。」と云つた

「今夜はもつと寒くなります。」と、案内者は得意なやうな顔をして云つた。

昨夜、大事にして焚き餘してあつた偃松の生木は、白い煙を立て、黎明のさわやかな空氣のなかに燃え出して來た。

(日本アルプス縦走記)

サック
Sack
袋

河井醉茗
名は又平
詩人
明治七年大阪府
堺市生

一八 山の歡喜

河井 醉茗

あらゆる山が喜んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみをして
舞ふ、躍る。
あちむく山と、
こちむく山と、
合つたり、
離れたり、
出てくる山と、
かくれる山と、
低くなつたり、

高くなつたり、
家族のやうに親しい山と、
他人のやうに疎い山と、
遠くなり、
近くなり、
あらゆる山が
山の日に歡喜し、
山の愛にうなづき、
今や
山のかゝやきは
空いつばいにひろがつてゐる。

(明治大正詩選)

阿部次郎

哲學者

東北大學教授

文學博士

明治十六年山形

縣生

一九 月見草

阿部次郎

一昨々年

大正七年

輕井澤

長野縣北佐久郡

東長倉村の大字

淺間山の南麓

著者の避暑して

ゐた地

月見草は私の好きな花の一つである。とりはなして云へば、黄色は自分の特に好きな色の部類に屬してゐるものではないが、あの花瓣の柔かさと、あの清新な鮮かさと、又その花を見る夕暮や曉のすが／＼しさとは、月見草のほのかな黄色を言ひ難くなつかしいものに思はせるのである。自分は一昨々年の夏、輕井澤で見た月見草の野原を忘れることが出来ない。朝まだ暗いうちに狭苦しく満員になつてゐる停車場の旅亭を出て、同宿のI君やM君と新舊兩市街の間の野原を歩いた。月見草が曉に近く幾らか萎れか



月 見 草

かつて限もなく咲續いてゐる上を、山の霧が廣く流れてゐた。自分達は言葉少なに並んで歩きながら、何とも言へず親しい氣持になつて又旅舎に歸つた。今自分の家にも一株の月見草がある。二三日前の夕暮、私は月見草の咲くところを眼のあたり見た。二階の欄干に凭つて食後の煙草をふかしてゐると、庭の月見草の蕾が急にふくらんで來るのが

見えるやうに思はれた。昔の人が蓮の花の開く音をきいて悟をひらいたといふ話をかすかに想ひ起しながら、急いで庭に出て月見草の傍にしゃがんで見てゐると、如何にも今咲きかけてゐる蕾の幾つかがある。最初に花瓣を包んでゐる萼が後退りを始める。萼が開くと、卷かれてゐた花瓣が次第にふくらんで来て、不意に一ひらが急にはじける。さうすると四つの花びらが一緒にふうわりと開いて来て、遂に蕊を見せて咲いてしまふのである。その咲きはじめに、ほのかな香氣が鮮かに鼻をうつときの氣持はなんとも言はれない。明日の朝になれば、凋んでしまふ果敢ない花ではあるが、咲く時の新しさは、それだけに格別なのかも知

れない。

私のやうなものには、月見草の咲くのを見ても固より悟は開けない。併し悟が開けなくとも、新しく咲く花を見まもる静かな愛の心は、本當にありがたいものであつた

(北郊雜記)

五十嵐力

文學者

文學博士

早稻田大學教授

明治七年山形縣

米澤市生

白河

福島縣西白河郡

白河町

二〇 鳥飼藏人

五十嵐 力

奥州の白河に鳥飼藏人といふ弓射の名人があつた。或日諸國行脚の老僧が訪ねて来て、御主人に御目にかゝりたいと云つた。藏人はすぐに逢つた。老僧は慇懃に挨拶して、「拙僧は御高名を慕つて遠國から參つたものでござる。

近頃不寐なる御願ながら、生涯の思出に貴殿の御射術を拜見させて戴きたいと思ふが叶ひますまいか。」

と頼み入れた。藏人は快く承諾し、やがて老僧を誘つて弓場に立つた。藏人の顔には誇の色が見えた。

「では拙い藝を御覽下さい。」

と云つて、弓を取つて矢を番へた、同時に茶碗になみく／＼と水をついで左の臂に載せた。第一矢を放つたと見る中に二の矢が繼ぎ、三の矢が繼ぎ、四の矢、五の矢、六の矢、七の矢が繼いだ。前の矢の筈に後の鏃が相接して、數本の矢がたゞもう一本のやうである。そして此の瞬く隙もなき働きの中に在つて、藏人の身體は造り据ゑた石像のやうに泰然と

して、臂の上の茶碗の水はさゞ浪だに立たなかつた。一々の矢が的の正鵠を射たことはいふまでもない。

老僧は感嘆して「あゝ」と曰つたが、やがてつぶやいて、

「しかしまだ弓射の弓だ。神に入つた技ではない。」

と云つた。藏人は聞きとがめて、

「御僧、何とおつしやりました。」

と尋ねた。老僧は

「いや、詞で御答は出来ませぬ。拙僧と一しよに山へ御出で下さい。」

と云つて先に立つた。藏人は弓矢を携へて従つた。

二人は遂に高い山の絶壁に攀ち登つた。斷崖は一面に苔

むして、上には矛形の峯の面を白雲が去來し、下には千仞の淵が泡を立て渦をまいて居る。そして足がかりの岩角は辛うじて爪先を託するに足るだけである。

老僧は先に立つて、悠然として藏人をさしまねいた。見れ

むきの浪に身は
かくろひてうけ
るかこと馬子の
かさゆくうまの
首ゆく

押 甲鳥園主人花

ば藏人は色が青ざめ、足がふるひ、そして冷汗は衣をしぼつて、踵まで沾して居る。老僧は云つた。

「足懸りは此の通りの大磐石で、向ふには松が枝に鳶が止つてゐて、無類の的で御座る。さ、御弓勢を御示し下さい。」

あ
い
う
え
お

か
き
く
け
こ

さ
し
す
せ
そ

た
ち
つ
て
と

な
に
ぬ
ね
の

甲馬園
三ノ

あ
い
う
え
お

か
き
く
け
こ

さ
し
す
せ
そ

た
ち
つ
て
と

な
に
ぬ
ね
の

十五嵐力筆蹟

藏人は答へなかつた。老僧は言葉をついだ。

「藝に至つた者は、我を去り天地に同じて、どのやうな高い山深い淵に臨まうとも、神氣の變るものではない。然るに御事は、前には誇る色があり、そして今はおどくして居られるではないか。まだ一御奮發を要しませうぞ。」

藏人は我慢の夢を覺まして再び懸命の修行をした、そして遂に驕ることなく恐るゝことなき至上の達人となつた。

(甲鳥園隨筆)

櫻井忠溫
陸軍大佐
明治十二年愛媛
縣生

二 太白山の激戦

櫻井忠溫

明くれば二十七日、旅團長より次の命令が下つた。

二十七日
明治三十七年七
月

前日來ノ將卒ノ勇敢ナル動作ヲ嘆賞ス。旅團ハ本日午後五時ヨリ太白山東方一帯ノ敵ヲ攻撃スル爲、全砲兵ヲ以テ砲撃ヲ加ヘ、左翼隊ハ砲撃ノ熟スルヲ待ツテ前進シ、敵ヲ攻略セントス。其ノ聯隊ハ此ノ好機ヲ逸セズ、死力ヲ竭シテ當面ノ敵陣ヲ占領スベシ。

午後五時は來た。我が全砲兵は一齊に砲門を開き、歩兵も亦全力を舉げて射撃を始めた。天地は忽ち硝煙に鎖された。飛彈の響は山谷を劈かんばかり。今度のは決戦であつたから、其の激しさは形容の語がない。我が歩兵は撃つては進み、止つては撃ち、奮進又奮進。されど霰と落ち來る敵彈は眞向きに前進するのを沮む。「小隊長殿」と微かに響



圖地近附山白太

てゐた。豫備隊たりし一箇小隊の工兵も亦第一線へ増遣せられた。

我が第一大隊は、遂に敵前實に二十米の近くまで肉薄した。されども、前に立塞がつて居るのは屏風の如き岩山で、殆ど一つの足場も無いので、如何にあせつても攀登することが出来ぬ。側面からは敵彈がばらばら飛んで来る。正面に向つた第二中隊は唯敵の機關砲の標的となるばかりで、見る見るうちにばたばたと仆れる。一彈は松丸大尉の劍身を貫いて左眼を掠めた。而して又我が砲兵の射撃は花火のやうに空中で破裂したゞけのことで、敵の防禦工事に對しては、一つの効力をも奏さなかつたらしい。「榴霰彈では役に立たぬ、榴彈を爆發せしめて敵壘の掩蓋を碎破しなければならぬ。これが爲には我が歩兵が損害を受けても致方

が無いから、とにかく早く榴彈を發射してくれ」と砲兵隊へ頻に傳令を派遣したが、一人として歸つて来るものはない、皆途中で僵れてしまつた。工兵の小隊長に「爆藥を送つて來い」と命じたが、それも間に合はなかつた。七時も過ぎ、八時・九時ともなつたけれど、形勢は依然として發展せぬ。彼此する中に、夜は已に更けた。物凄き下弦の月は淡く戰場を照して、陣地の半面を朧に露して居た。この時、左翼隊なる第二大隊長、内野少佐より聯隊長にあてゝ左の意味の通報が來た。

我が大隊ハ今ヨリ全滅ヲ期シテ突撃ニ移ラントス。貴官モ共ニ攻勢ニ轉ゼラレンコトヲ希望ス。予ハコ、ニ

謹ンデ告別ノ敬意ヲ表ス。

折しもあれや、遙かに左翼の方に當つて、嚙喰たる「君が代」の喇叭が聞えた。月影細き空を傳ひ、餘韻微かになく曳いて、予等の腦裏に一入深く沁み渡つた。「君が代」の喇叭の聲は恰も陛下御身親ら「前へ」と號令せらるゝかの如くに感じられて、將卒は勇氣百倍、乍ち奮躍して、彈雨を冒し巖石を攀ぢて猛進し、大喊聲を放ちつゝ敵壘に突入した。眞黒に固まつた一團の先頭に立つたる松村少佐は聲を怒らして、

「突つこめ、突つこめ。」

「君が代」の喇叭はなほ盛に起る。各隊は續いて「萬歲々々」を連呼して聲援を與へた。山上には劍尖相撃つて火花を散

らし、接戦格闘、これぞ大和男兒の最後の肉彈なるぞ。傲慢無禮の此の仇、今ぞ思ひ知れや」と打込む太刀筋に血を流す伏屍の數知れず。慘といへば慘の至であるが、窮苦の極始めて敵を破り得たる我等が愉快は如何ばかり。海嘯の如き一團の後からは又一團と、我は續々兵力を増加するので、敵は遂に此の猛烈なる攻撃に堪ふること能はず、時は七月二十八日午前八時、東天紅を染出したる頃、我が軍は確實に太白山一帯の高地を占領した。軍旗はひらくと陣頭に翻り、萬歲の聲は潮の如くに涌いた。

(肉彈)

櫻井忠温著

二三 汝の母

英國の一飛行士官が、敵の飛行機を射落した時の事である。敵機の地に落ちるやいなや、敵の塹壕の前と知りつゝ、敵機の跡を追つて着陸した。見ると、敵機の翼は折れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えて居つた。敵ながら、今まで空中に飛行して居つた時の事を思ふと、そゞろに物がなしく、屍體を片附けてやらうとして、胸のポケットの邊に手を觸れると、何か堅い物がある。取出して見ると、一葉の寫眞で、それに「汝の母」と書いてある。空中戦の最中にも、母の寫眞だけは身につけて居つたのである。取敢へず屍體を味方の塹壕へ運んで置いて、更に一回の空中戦を試

Pocket
ポケット

みたが、幸に武運強くて安全に味方の戦線に歸つた。歸るとすぐ其の屍體を處理したが、其の間は塹壕中の敵兵も一向發砲をしなかつたのは、それと知つたのであらうか。その夜、英國士官の思は、射殺した敵と其の老母の上、つゞいて我が身の上から、早く亡くなつた我が母の事に馳せて、感慨に堪へず、終夜まんじりともしなかつた。寐られぬまゝに、不幸なる敵の母へ手紙を認めた。

私はイギリスの飛行士官でございます。

今日、私はドイツの一飛行機を射落して一つの功名をしましたが、乗組の士官が死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏して居たのを發見し、其の母御たるあなたに

此の手紙を差上げるのでございます。
私は御子息を殺しました。勿論、其の人を憎んでの事ではございません、又母御たるあなたの御心を察しないのでもございません。只これが戦争といふ残忍な仕事に於ける私の義務であつたのです。敵士官即ちあなたの御子息が味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、其の結果、味方は必ずやそれだけの攻撃を受けて、味方の兵何人かの生命は、其の爲に亡くなつてしまひます。此の不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、其の乗組士官の遺骸からあなたの寫眞を發見して、感慨に堪へないのでございます。



空中戦

私は子供の時に母をなくしました。今でも人の母を見て羨ましく思ふのでございます。で、私の殺した敵士官が、あなたといふ母御をもたれ、最期までもあなたの寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分にはじつとして居られない感じがします。彼の人にはや此の世の人ではございません。あなたも其の報知を得て、

さぞ悲歎に暮れて居られませう。殺した私があなたに手紙を上げられた義理ではないとも思はれませうが、私としては、その人の母御に對して、丁度我が母に對する様な親しい感じがするのでございます。私は御子息を殺しました。併し今、私があなたの寫眞を前に置いてあなたに向つて話をして居るのか、又は私が亡き母に向つて手紙を書いて居るのか、自分には區別がつきません。唯筆先に涙がはふり落ちるばかりでございます。御子息を殺したのは、戦争といふ残忍な惡魔の仕業でございませう。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、さう思つて私の罪を赦して下さるでせう。そして、又御子

金
301 245678
修作加筆

息の亡くなられた代りに、わたしは一人の母を得た様な思のするのをお察し下さるでせう。今私の書くこの手紙は御子息と私と二人の魂が――殺された御子息と殺した私の眞心が――一緒になつて書くのだと思つて下さい。もう此の上には何も書けません。御察し下さい。此の手紙はイギリス軍の本營から本國外務省へ送られ、それから中立國の手を経てドイツなる宛名の人に届いた。それを讀んだ時の老母の感じはどんなでございましたらう。

數日の後に、長い手紙がその英國士官へ參りました。悴の戦死は承知して居りましたが、あなたから、こんな情

深い御手紙を請取らうとは思ひも懸けませんでした。通常ならば、悴の仇といふべき所ですが、御手紙を見ますと、悴が再生して、此の母に手紙を贈つてくれた様に思はれるのです。あなたが悴の懷にあつた私の寫眞に對して、亡き母に對する心持がすると云はれる様に、あなたの御手紙は、私にとつては戦死した悴の手紙としか思はれません。あなたは、悴を殺したといはれます、事實又それに違ひはありません。併し殺すも殺されるも、御互の國の爲で、個人としては何の怨もありは致しません。只仇といふべきあなたが私を母の如く思ひ、私にも亦あなたが死んだ悴の身代りの様に思はれるのは、何たる不思議な事でせう。

議な事でせう。

併し、思へばこれも不思議ではございません、同じく神の愛子として、御同様に眞の愛情を汲み得るのです。死んだ悴もあなたを兄弟と思ひ、つゆ怨がましい心を懷かず、今は天上に居つて、この世に生残つた母と、又不思議に兄弟になつたあなたと、又他の兄弟との爲に、心の平和を得るやう、神様に御願をして居るに違ひございません。三人の男子の中、戦死したのは末子ですが、二人の兄もやはり戦線に出て居ります。何時弟と同じ運命になるかも分りません。併し私は、末子の戦死した爲にあなたといふ新な子を授つて、益、深く神様の御心を汲み得ました。



今後如何なる不運が來ようとも、神に對する信仰は愈々厚くなるやうにと祈つて居ります。

やがて戦争が濟み、平和の時が來て、そして二人とも無事に歸る事になれば、私のこの家へ一度あなたに來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは死んだ悴とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滞在して下さい。私はその日の早く來るやうにと祈つて居ります。

そして最後には、汝の母と書いてあつた、彼の寫眞にあつた通りの筆蹟で。（時局に關する教育資料に據る）

西條八十

詩人

明治二十五年東京生

二三 芙蓉の花

西條八十

おそろしきなるも去りたり。
靜かなるわが家の庭に
今日も咲く芙蓉の花よ。

わが兒等は何時もの如く
おりたちて砂ほり遊ぶ。

今日のみは、嗚呼わが兒等よ、
その赤き鋤ををさめよ。

おそろしきなゐと焰ほとに、
あまた世の幼児どもは
親の手に抱だかれて失せぬ。

その小さき鋤を見るだに
あはれなる葬はふりを偲おもふ。
わが胸はいま痛むなり。

今日のみは、嗚呼わが兒等よ、
つゝましく傍かたへに坐して

亡き友のために祈れよ。

あはれ幸さいうすきその魂ぞ、
かの白き芙蓉のごとく
うるはしく穢けがれなかりし。
(憶東京)

二四 猫

夏目漱石

吾が輩は近頃運動を始めた。如何なる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れないから、一寸説明しよう。吾が輩は不幸にして器械を持つ事が出来ない。だからボールもバットも取扱ふことが出来ない。次には金がないか

夏目漱石
名は金之助
文學者
東京生
大正五年
年五十
ボール
Bat
バット

ら買ふ譯に行かない。此の二つの理由からして、吾が輩の選んだ運動は一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬するものと思ふ。

主人の庭は竹垣を以て四角にしきられて居る。縁側と並行して居る一邊は八九間もあらう。左右は雙方とも四間に過ぎぬ。今吾が輩の云つた垣巡りと云ふ運動は、此の垣の上を落ちない様に一周するのである。是はやり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くと御慰みになる。ことに處處に根を焼いた丸太が立つて居るから、一寸休息に便宜がある。今日は出來がよかつたので、朝から晝迄に三遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白

くなる。到頭四遍繰返したが、四遍目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間ばかり向ふに列を正してとまつた。

「是は推參な奴だ、人の運動の妨げをする。ことにどこの烏だか籍もない分際で、人の堀へとまるといふ法があるもんか。」と思つたから、「通るんだ、おい、退き給へ」と聲をかけた。眞先の烏は此方を見てにや／＼笑つて居る。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食つて來たに違ひない。吾が輩は返答を待つ爲に彼等に三分間の猶豫を與へて垣の上に立つて居た。烏は通稱を勘左衛門と云ふさうだが、成程勘左衛門だ。吾が輩が

いくら待つてゝも挨拶もしなければ飛びもしない。吾が輩は仕方がないからそろゝ歩き出した。すると眞先の勘左衛門がちよいと羽をひろげた。やつと吾が輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。

此の奴め、地面の上なら其の分に捨て置くのではないが、如何にせん只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にして居る餘裕がない。といつて、また立ちどまつて三羽が立退くのを待つのもいやだ。第一さう待つて居ては足がつゝかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな處へはとまりつけて居る。従つて氣に入ればいつ迄も逗留

するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分勞れて居る。況や綱渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさへ落ちんとは保證が出来んのに、こんな黒装束が三個も前途を遮つては容易ならざる不都合だ。愈となれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそさう仕らうか。敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまり此の邊には見馴れぬ人體である。口嘴が乙に尖つて、何だか天狗のまうし子の様だ。どうせ質のいゝ奴でないには極つて居る。退却が安全だらう、餘り深入りをして萬一落ちてもしたら尙更恥辱だ。と思つて居ると、左向_レけをした鳥が阿呆と云つた。次のも

眞似をして阿呆と云つた。最後の奴は御丁寧にも阿呆阿呆と二聲叫んだ。如何に溫厚なる吾が輩でも是は看過出來ない。第一自己の邸内で烏輩に侮辱されたとあつては吾が輩の名前にかゝはる。名前はまだないからかゝはりやうがなからうと云ふなら、體面に關る。決して退却は出來ない。諺にも烏合の衆と云ふから、三羽だつて存外弱いかも知れない。「進めるだけ進め」と度胸を据ゑてのそく歩き出す。烏は知らん顔して何か御互に話をして居る様子だ。愈、癩癩に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合はせてやるんだが、殘念な事には、いくら怒つてもものそくとしかあるかれない。漸くの事先鋒を去る

こと約五六寸の距離まで來て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申しあはせた様にいきなり羽搏きをして一二尺飛上つた。其の風が突然吾が輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい踏みはづしてすとんと落ちた。

これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽とも元の處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾が輩の顔を見おろして居る。圖太い奴だ。睨みつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして少々唸つたが、益、駄目だ。俗人に靈妙なる詩の意味が分らぬ如く、吾が輩が彼等に向つて示す怒の記號も何等の反應を呈しない。考へて見ると無理のない所だ。吾が輩は今まで彼等を猫として取扱つて居た。それが惡

い。猫なら此の位やれば慥かにこたへるのだが、生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。機を見るに敏なる吾が輩は到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと縁側へ引上げた。(吾輩は猫である)

二五 蛞蝓と蝨斯

坪内逍遙

ある庭園

坪内逍遙
名は雄蔵
英文學者
劇作者
文學博士
早稻田大學名譽教授
安政六年(三二九)
美濃國生

Shirts
シャツ

Necktie
ネクタイ

蝨斯は例の紙製の假面を被り、背中に同じく紙製の翅をつけ、白地に綠色、堅縞のシャツを着、同じ柄のズボン下を穿いて、眞赤なネクタイを胸元に結び垂れ、金の腕時計をはめ、シガレットを吹かしてゐる。蛞蝓は鼠色の布で拵へた袋をすぼりと頭から被つて、裾を長く穿き、顔の處だけに縋子を張り、針金製の角を折々出す。始終這つてゐる。

シガレット
Cigarette

蝨「相變らず君はぬらくらと寝そべつてばかりゐるねえ。」
蛞「寝そべつてゐるんぢやないよ。君達と違つて、僕等は何時だつてかうしてゐるんだ。歩く時だつて、駈ける時だつて。」

蝨「はゝはゝ、『駈ける時だつて。』が聞いて呆れらあ。一體君は一日に何町步ける。」

蛞「休まずに歩きやあ、五里でも十里でもあるくよ。」

蝨「大きく出たね。ぢやあ二三間の處でもいいゝが、僕と競走して見るかい。憚ながら、僕は三つも飛びや二三間も先へ御到着だよ。」

蛞「僕だつて、まさか君なんかに負けない積りだ。」

蝨「まさか。」だ。へつ。ほらも休みく言ひたまへ。」

蛞「怒つて」「何がほらだい。」

蝨「ほらもほら、大ぼらに走をかけて、さうして輪をかけて、スクエヤしたやうなほらだと言ふのだ。」

スクエヤした
自乗した
Square

蛞「いよく怒つて」「失敬な。」

と角を出す。

蝨「は、そんなへらくの角なんか、誰が怖がるもんか。」

掴み合をしさうになる。そこへ近所の蜘蛛が仲裁に這入る。蜘蛛は頭の上に紙製の蜘蛛の形を笠のやうに載つけてゐる。黒ずんだシャツを着て、同じ色のズボン下を穿いてゐる。

蜘蛛「おいく、よせく。どうしたんだ。え。」

蛞「だつて、蝨斯があんまりなことを言ふもの。」

蝨「なあにね、生意氣に、奴めが僕と競走し得られるなんて言

やあがるもんだから、それでその……。」

蜘蛛「まあく、論より證據だ。出来るといふなら、やつて見た

らい、ぢやないか。何なら、僕が審判役にならうから。」

蝨「だつて君馬鹿々々しいやね。てんで相撲になりやしないもの。」

蛞「やつて見もしないで、どうしてそんな事が言へる。」

蝨「おや、どこまで生意氣だらう……。よし、ぢやあやらう。」

蜘蛛「それがいい、それがいい。ぢやあ僕が（と絲を繰出す眞似をして）かういふ風に線を引いて、間敷を測るよ。（絲を繰る眞似をして、三四間先まで走つて行つて）さ、こゝが決勝點だよ。こ

スタート
出發

の木が目標だよ。……さ、用意。」

蝸蛄蝸に「さ、構はず先へ這出しな。一しよにスタートしちやあ大人氣ないから僕は二三分後れて出かけよう。それで澤山だ。どれ、一服やらかさうか。」

卷煙草を出して吹かしてゐる。

蝸「ぢやあ、出るよ。」

蝸「いゝとも、く。」

蝸蛄這ひはじめる。

蝸尻目に見て「どうだ、あのざまは。(腕時計を見ながら)まだやつとあそこまでだ。……(卷煙草をすて)どれ、そろく。まづ一つ飛んで驚かしてやらう。憚ながらたつた一とび

でずつとお先へだ。」

と飛ぶ。と、見當がずつとそれて、約一間も左へ飛ぶ。その間蝸蛄は同じ速度で目標の方に進む。

蝸「おつと、あんまりはずみ過ぎた。今度は前の取返しに大飛だぞつ。」

と大きく飛ぶ。と、又ずつとそれて、一間半も右へ飛ぶ。かうして二三度飛廻つてゐる中に、蝸蛄は目標の處へ到着する。

蝸「蝸蛄君、萬歳。」

蝸呆れて「おや、く、おや、く。」

蝸「おい、蝸斯君、もう駄目だよ。君が負けた。つまり君はまるで目的をきめないで以て、むやみやたらに飛跳ねるんだから駄目だよ。これからは飛ぶ前に先づちゃん

と目的をきめ給へ。(週刊朝日)

二六 保昌と袴垂

萩野由之

萩野由之
國學者
文學博士
東京帝國大學教
授
佐渡國生
大正十二年歿
年六十四
保昌
丹波・大和・攝津
等の國守に歴任
した
長元九年(一六三)
歿
年七十九
源賴信
滿仲の子
賴光の弟
鎮守府將軍に任
ぜられた
永承三年(一七〇)
歿
年八十一

藤原保昌といふ人は大納言藤原元方の孫で、母は醍醐天皇の御孫であつた。だから身分も立派な人であるが、柄に似合はず力が強く、武藝に勝れて、源賴信等と同じく武勇を以て知られてゐた。當時の風習は、文官でも、武人でも、高尚な人は皆音樂の嗜があつた。中でも保昌は殊に笛が上手であつた。

夜中は既に過ぎて、町々は皆寢靜まつた頃であつた。保昌は月の光の皎々たるまゝに、興に乗じて例の笛を取出し、こ

れを吹きつゝ家路についた。此の時の保昌の心は、笛の音が月と共に澄渡つて、その音律が自然に通ずるのを喜ぶほかには何物も考へなかつたであらう。眼に入るものは、月と我との外には何物もなかつたであらう。まして強盜がぬき足さし足で背後から切りつけようなどとは夢にも知らなかつた。

當時は警察制度の不備な爲に、京都の市中には強盜追剥の類が甚だ多かつた。中には隊を組んで人家に押入る者さへあつた。これらの輩の巨魁に袴垂といふ者があつた。そろゝ夜寒になつたから、一かせぎして衣服を調達しよう、とある夜ひそかに市中を鵜の目鷹の目。折しも一人の

山内村 廣島縣 廣島市

士が美しい衣服を着て、従者も連れず、唯一人、しかも夜中すぎに、笛を吹きながら徐行するのを見出した。「あゝ、よい掠鳥がかゝつた。これこそ着物を我にくれる爲に來たやうなものだ」と喜んで尾行した。然るに彼の士は一向知らぬ風で、依然として笛を吹きながら徐行する。少しも氣附いた様子がない。袴垂もさすがに不審に思つて、手出しもせず、そのまゝ十餘町ついて行つたが、やはりかの士は笛を樂しみながら歩いて行く。袴垂は臆して手が出ない。袴垂が心を取直して、一思にと刀を抜いて走りかゝると、彼の士は始めて笛を止めて立止まつて、「何者だ」と一喝した。さすがの袴垂も魂を失つたやうになつて、もはや逃げも匿



大穂芳車寫

(畫年芳蘇大) 垂 袴 と 昌 保

れも出來ぬと觀念したから「私は追剝で、袴垂といふ者でござる」と答へた。その時彼の士は、「さやうな者が居るとは聞いてゐた。さあ、おれについて來い」と、また笛を吹きながら歩いて行つた。袴垂もその態度應答の工合で非凡な人だわいと思ひ、鬼神にでも捉まつたやうに、畏る畏る隨行した。やがて大きな

賴光
源滿仲の子
東宮大進に任ぜ
られた

治安元年（六八）
歿

貞道

村岡五郎貞道

季武

卜部六郎季武

秀國の子

治安二年（六九）
歿

源綱

渡邊綱

坂田金時

通稱主馬助

門のある家へ入った。彼の士は再び出て來た。そして綿入の衣服を袴垂に取りらせて、此の後うつかりした事をして過ちすな。と言含めて歸らせた。袴垂は生返つたやうな心地がしてその家を立去つた。この士が即ち保昌であつたのだ。

其の後袴垂が他の犯罪で捕縛された時、今までに恐しかつた事は唯一度ある、それは月夜に笛を吹いて通つた人をねらつた時であつた。と物語つたと云ふ。

世に武將の四天王として、一に賴光、二に保昌、三に貞道、四に季武と數へるが、平貞道や平季武は源綱、坂田金時と共に賴光の部下の四天王で、保昌と肩を比べる人ではない。賴光

市原野
又機原野
京都府愛宕郡鞍馬の山口

は武將として保昌と匹敵するが、保昌のやうな優美の點が缺けてゐるやうに思はれる。賴光が市原野で鬼童丸を殺したのは、彼が武勇談の一つであるが、その時は綱や貞道が隨行したのであつた。のみならず、強盜一人を三人がかりで切殺したのである。

保昌が月下の笛に心を澄まして、袴垂が月の雲隠を伺ひつつ近寄つたのを知らぬ態度の大きさは、また格別ではあるまいか。（史談と文話）

高村光太郎
彫刻家
詩人
明治十六年東京生

二七 かゝやく朝

高村光太郎

目がさめると天井があかるい。

そとの松の木に五六羽來て騒いでゐる雀の聲。
おやと思つてはね起きると、

枕もとの窓かけ一ぱい日が當つてゐる。

お天氣だ。

お天氣だ。

たうとう雨がはれたのだ。

九月からかけて

四十日あまり暗くつゞいた雨、

青玉のやうな東京の秋の空をめちやくにし、

秋の木の葉のゴブラン織を憂鬱の色にぬりつぶし、

ゴブラン
Gobelin
佛國の巴里で
織出す一種の
花織毛氈

毎日々々

はてしなく濕つばい調子ばかり聞かせてゐた雨、あの
雨がはれたのだ。

カダンス
Cadence
音調
調子

忘れかけてゐた日の光が

窓かけをあげると、まばゆい強さに、

斜に、幅びろに、機嫌よく流れこんで

白いシートにつきあたる。

手にうけて振りいたいほど

活潑に飛びはねる。まるで生きものだ。

シート
Sheet
敷布

バケツ
Bucket
桶 亞鉛製の

たちまち私の心はをどり出し、
着物もそこく二階の窓をあけ放つ。
こんな朝一人でゐるのがもつたいたなく、
遠い故郷に歸つてゐる人のことをちよつと考へて、
手をあげて合圖したいやうな、
おはやうと言つてみたいやうな氣になり、
つい微笑して部屋のそこらぢゆう見まはす、
何から何まであかるく、
うれしさうで、
とんでもない奥の方の唐紙の隅にまで、
窓ぎはのバケツから反射する。

レース
Lace

お、太陽がまろくをどつてゐる。
わたしはともかく下へおりる。
少し暗い梯子段を下りて、廊下づたひに
いろんな室の戸をあけ、窓をあける。
到るところ日の光。
大窓のレース越しに、
そして又櫻の木の枝越しに、
ぱつとあびせかける黄金の陽が、
まだ少しひやつく大部屋一ばいに
不思議な映畫をうつし出す。

あたりの家具も道具もすつかり大きな眼をあけて、
みんな私の方を見る。

わたしも一々挨拶して、

椅子のあたまをかくく撫でさすりながら、

折目のついた新しいタオルを持出して流しへ行く。

蛇口から勢よく出る水が、

白瀬戸の洗面器に渦を卷いてほとばしると、

おゝ、こゝにも一條の日の光が

さつと水を透きとほし、

ざらつく波紋を起して私の手にからみつく。

タオル
Towel
西洋手拭

何はともあれ箒を持つて外へ出る。

まだ早い出来たての空気を存分に吸ふ。

入口のだんゝに立つて、

幾層倍も大きくなつたまつ青な空を見あげる。

どこから出たのか、

数かぎりない赤とんぼが、

ぴかゝゝぴかゝゝ飛んでゐる。

しぶくさびた櫻のはがくれに、

思ひがけない金色の柿の實が

おしやべりな頬白をじらしてゐる。

子供のやうに嬉しくなつた私の心は、

珍しい天と地とのはれやかさにはしやぎ、
はるかに町のどよめきを聞きながら
東京のちまたに満渡る今朝の歡の聲を思ひ、
種々さまざまな世相のおもかげと場合とを
それからそれへと空想する。
かゝる時だしぬけに、
「いゝお天氣さまでございます」と、
隣の植木屋の岩乗らしいおちいさんが
孫を抱いて門から出て来る。
人通りもまだあまりない往來の
しつとりとしたからたちの垣根を背にした

そのおちいさんの顔に、
遠慮のない氣さくな太陽が、
おゝこゝにも照つてゐる。(明星)

鶴見祐輔

法學士

前鐵道省參事
明治十八年群馬
縣生

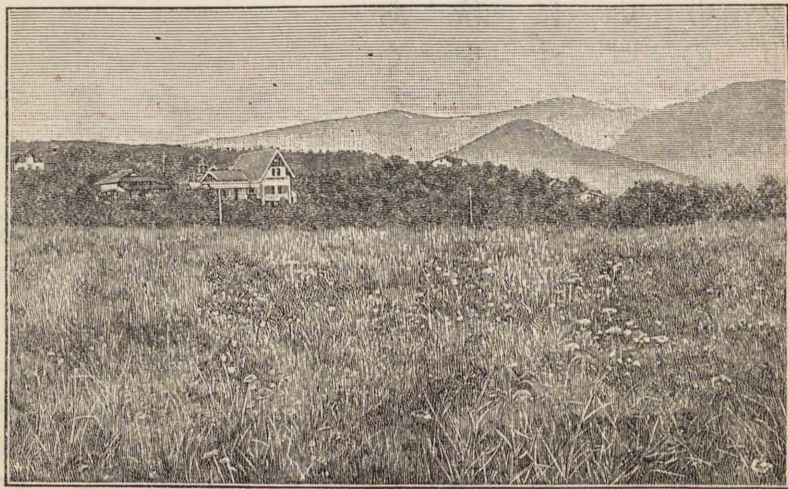
今年の秋
大正十二年十月

二八 秋の輕井澤

鶴見祐輔

あくる朝床を出て、窓を押した時に、自分ははじめて今年の
秋を見たと思つた。自分たちの泊つた二階の窓のすぐ前
に、すれゝに檜が幾株か植ゑてあつて、その枝の間から、廣
いゴルフの庭が見える。四方山に囲まれた二十町歩ばか
りの谷間の野原に、一昨年頃から手入れをして、輕井澤ゴル
フ俱樂部が出来たのである。

淺間
信濃・上野の國
境に峙つ活火山



輕井澤

左にだしぬけに峙つてゐる
離山と、右に緩やかに波打つ
小瀬連山の間から、稍、黝みが
かつた紺青の色をした淺間
の頂が僅かばかり覗いてゐ
る。右の山の麓に生えた幾
百株の榊の林は、赤褐色の葉
が霜にうたれて縮んでゐる。
左手の離山の裾は、夏は眞青
に茂つてゐる雜木林が、今は
大方紅葉して、濃淡とりど

の文をなしてゐる。その榊の林と雜木林との間に、やゝ爪
先あがりの廣い原が、見渡すかぎり續いてゐる。ところど
ころに櫟や榊が一二本あるだけで、一面の芝生である。そ
れが丁度、秋の半ばで黄ばんだ色でべつたり塗つたやうに
見える。空の底まで抜けるやうな秋晴で、暖い日が一切の
物象の上に、洪水のやうに降りそゞいでゐる。

輕井澤に遊ぶ人が皆一樣に感じるのは、この地の大氣が澄
みきつてゐることである。雨あがりの五月の曙のやうな
綺麗な空氣で、しかも、それが乾き切つてゐる。濕氣と塵埃
との二つから、全く解放されてゐる。濁つた重苦しい都會
の空氣に抑へ附けられてゐた人間の魂が、此處へ來ると、い

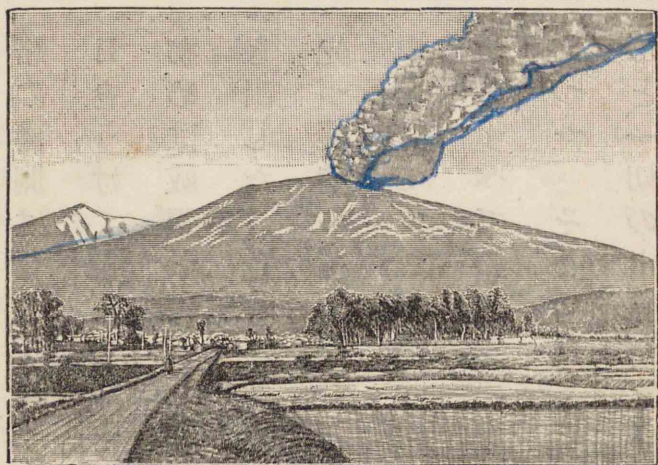
つも、はた〜と軽く羽ばたきして、廣い自由な世界に翱翔していくやうな氣がする。

すべての木の葉、草の葉が、天然のまゝの色をして、夏は青々と、秋は黄と赤と、鶯色とに輝いてゐる。そして草の葉の香りが高い。その間を白い道が靜かに連なつてゐる。

碓氷峠
關東平野の上野
から信濃の高原
に通ずる峠
夫人
其の家の主婦
主人
アメリカ人
名は分らないが
作者の知人であ
る

お天氣がいゝから朝のうちに碓氷峠まで往かうと、夫人がいひ出した。しかけた用事のある主人だけ残して、自分たち四人が出かけた。緋の紅葉の模様のついた着物を着た和子は、赤い鼻緒のついた下駄を穿いて、大人と同じ歩速を保つために、小走りに走りながらついて來た。

薄ら寒い程の朝だが、歩いてゐるうちに少し汗ばんで來た。路の兩側は背丈を沒するやうな薄である。白い穂が秋の日をうけてきら〜と輝いて居る。初めは威張つてゐた和子も、坂の中腹でたうとう弱音をふき出した。色々な理窟をつけて道草を喰はうとし出した。先づ龍膽の花を摘むといひ出した。それから栗を拾ふと申し立てた。その次には、道端で折紙をしようと提議した。そのすべての名案の底を流るゝ彼女の希望は頗る明白であつた。そこで、たうとうおんぶすることにする。さうすると、一切の申立が立ちどころに雲散霧消した。中程の茶屋のところから、汗をふきながら、脚下に横たはる



ふことが、うそのやうな氣がして
來る。錦のごとき峰巒の懷に抱
かれて、平和な山村が秋の日の下
に輝いてゐる。
淺間山がのぞいてゐる。その澁
い紺青の色調と、何の奇もないや
うな無造作の姿とが、ある親しみ
をもつて自分に迫つて來た。

夏の夕べ、夕日が落ちて大空が次第に光明から薄明、薄明か

ら夕闇に變つていく時分、じつと立止つて淺間山のいろの
變化を觀察し驚嘆したことのある人々は、必ず再びこの山
を訪うて、秋の淺間の深い色を眺めなければならぬ。夏
は周圍の木の葉が悉く一色の緑である。しかし、秋は一切
の山々が黄ばんだ明るい色になつてゐる。そして空も大
氣も、夏と異なる静けさに沈んでゐる。それが淺間の紺青
の色を一層引立たせて見せる。

富士は日本に特有な山であるといふ意味に於て、色々の感
じを呼起す。しかし、自分は、多く謳はれざる淺間の山容を
愛する。それは明かに、輕井澤の最も大切な存在理由を形
づくる。

思想山水人物

高山樗牛

名は林次郎

評論家

文學博士

山形縣鶴岡町生

明治三十五年歿

年三十二

嘲風

妹崎正治

宗教學者

文學博士

東京帝國大學教

授

明治六年京都府生

生

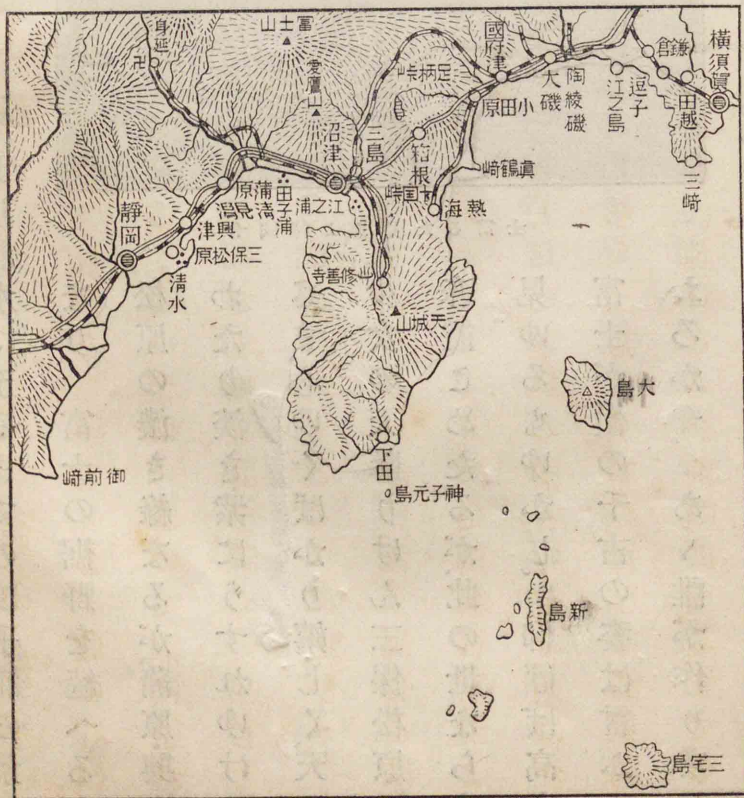
甲非、伊豆、
安房駿河、遠江、信濃、
相模、武藏、上總、下總、
葦、

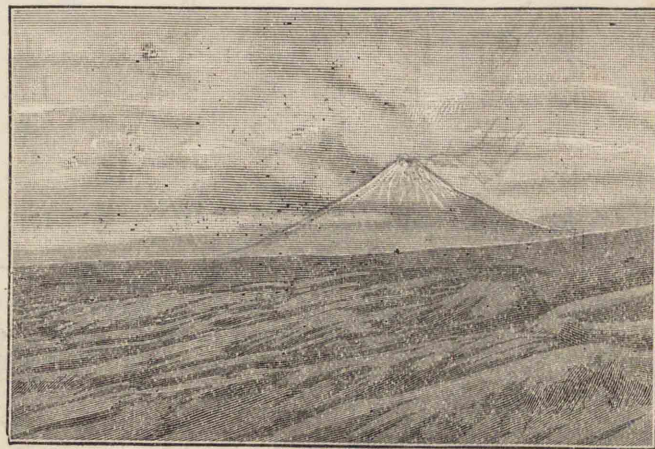
二九
十國
峠

高山樗牛

十國峠の登臨はこよなう壯快なる遊なりき。此の峠は、函
嶺より天城に連る所謂富士火山脈の一峰にて、嶺に上れば、
關の東西より豆州の沖かけて、十國五島を眺め得べしとぞ。
ある日、空晴れわたりたるに、われ嘲風とこゝに遊びき。
山の嶺は熱海より五十町を出でざれば、いたう高しとは言
ひ難し。されど、相駿二州に跨りて北は足柄箱根富士より、
南は天城・神子元島より、大島・三宅島の山々を望み、西は江浦・
静浦を眼下に見おろし、名も高き田子浦づたひに、清見潟よ
り三保松原かけて遙かに遠江なる御前崎に至るまで、東は
眞鶴崎のあなた、小田原・國府津・湊綾の磯邊に沿うて、江島・鎌

倉の山々より田越・三崎のはてに至るまで相模灘を包みてかすかに安房・上總の遠巒を望む。景物の壯大類ふべきものなし。





富士國よ見りたる富士

けん自然の麗しさぞ。

殊に美はしきは、江浦より清水に至るまでの田子浦の景色なり。富士の裾野を縫へる小松原の濃き緑なるが、蒲原興津わたり淡き紫にうすれゆけるさま、心ゆくばかり嬉しく、天つ少女の天降りけん三保松原の春霞こめたるが、此の世ならず見ゆるもゆかし。仰げば高き富士が嶺の千古の姿は言ふもおろかや。あゝ誰が作りなし

笠井信一
當時の巖手縣知事
今は貴族院議員
慶應元年（二五五）生

箱根の一峰に雲起りぬ。はじめは膚寸の大きさなりしが、谷開け、風加りて、漸く擴り、はては八峰の全面を掩ひて、驀然として西の方にたなびきぬ。愛鷹の峰にかゝるころ、富士嵐に逆らひたるにや、雲行忽ち天に向ひて、二山の間に白雲の壁を築けり。其の頂、山風に散じて満天を覆ひ、濛々として咫尺を辨へず。我、衣襟をあはせて凝眸すること多時。嘲風杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すること三たび。少時にして空霽れて、函嶺の崔嵬、富嶽の清容、もとの如し。満天の雲霧、その何處にゆきたるかを知らざりき。（樽牛全集）

三〇 明治天皇の御遺物

笠井信一

先月
大正二年一月

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰出されましたので、例刻に参内致しましたところが、十一時すぎ特別の思召によつて權殿参拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間、皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には長く茲に在らせられて、徳教を御敷きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。然

カーペット
Carpet

らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外な事で、平常私共が参内の節、休息を許される御部屋の方が却て遙かに御立派である。餘り廣くない二間續きの御部屋で、檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされていない。御机も御椅子も實に御質素なものです。絨毯の如きは最初敷かれた儘ですから、後には色も大分褪めて参りました。それで、侍臣から御取替のことを屢願ひ出しましたが、御許がなくて、遂に今日に至つたのださうでございます。此の御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。此の御部屋には、先帝の御學問所に於て御使用になつた御遺物全部、其の儘に据置かれてございます。これは今

上天皇陛下の大御心に出でさせられたる趣に拜承致しました。構造も方向も廣さも御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も昨年七月十三日即ち先帝最後の出御當時の儘に御備附になつてございました。床の間には其の當時の御軸物が掛けてあり、其の前方には御劍が數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどとは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

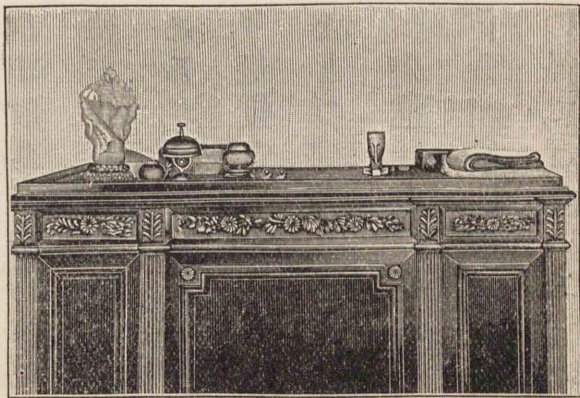
まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕がございます。是は先帝が御煙草を召上つていらつしやつた

Table
テーブル

とき、臣下より政務の言上がありました。先帝には御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聴取^レあらせられた折、煙草が墜ちて此の焼痕がつくやうになつたのだと申すことでございます。さて此の焼痕のあるテーブルの羅紗を御取換へ申し上げんがため、侍臣より幾度となく願ひ出しましたけれども、斷じて御許がなかつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ひる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸

の文字は見えないほどに御使ひふるしに成り、墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございました。鉄も亦同じく普通市場にある品で、其の傍に學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調べに用ひた儘、其處に置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ひになつたものと承つて、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。



御机 (明治神宮寶物藏蔵)

ホワイトシャツ
White shirt
ボール
Board

御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは青山御所において遊ばされた頃から久しく御使用になつたもので、毛も次第に磨りきれ、皮も遂に破れるやうになりました。そこで侍臣より御取換を願ひ出しましたが、「なに、これでよい」と仰せられて御許がない。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。併し適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍従が「此の邊が犬の皮です」と説明して居られました。其の傍にホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのものが澤山に積重ねてございましたから、「何に遊ばす物か」と

侍從に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとして御手許に留置かせられたものであるとのことでした。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後は別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ひになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して御歌所に御廻し申したのださうでございます。實に天下の物は用ひるに其の途を以てすれば一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞召

されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は務めて御節約相成り、些かにても冗費をば御省き遊ばしたと申す事でございます。一天萬乗の大君におはしながら、禿びたる御筆を御用ひになり、破れたる敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆是節すべきを節して有用の事にのみ御用ひ遊ばすといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

諸御次の間には、造花や彫刻や種々な物品が備へられてご

ございました。之を拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵の爲御持歸り、又は御買上げにならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてゝ殆ど裝飾の用を爲さぬものまで其の儘になつてございます。その他美術工藝品の如きも皆御獎勵のため、俗人の好みとは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに

ます樂みはあらじとぞ思ふ。

とございますが、實にこのやうな御樂みを求めさせられん

が爲、先帝には長い年月の間、大なる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は先帝の長き御心づくしの御蔭を以て隆々として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は長い間、聖天子御一人に非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國民のちからのかぎりつくすこそ

わが日の本のかためなりけれ。

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても力のあらんかぎりを盡し、以て我が日の本のかためのため應

分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。(巖手縣學事彙報)

吉江孤雁

名は喬松

文學者

早稻田大學教授

明治十三年長野

縣生

上海

支那揚子江の河

口

東洋第一の貿易

香港

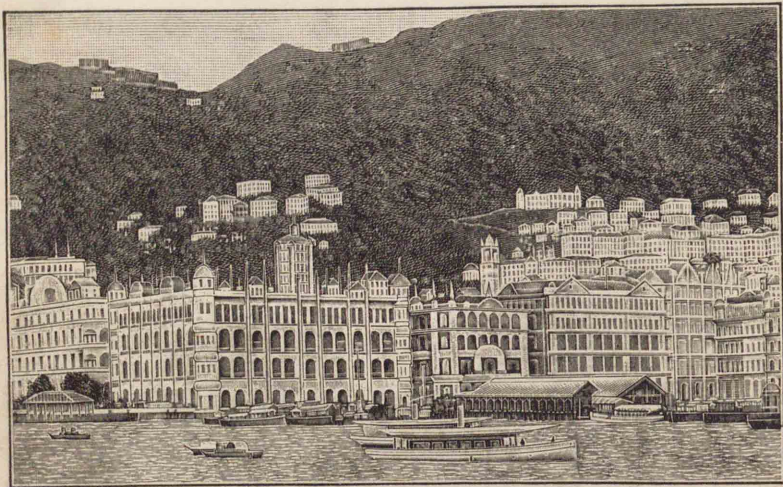
支那廣東河口に

ある一小島

三一 波に咲く花

吉江孤雁

上海を出て、臺灣海峽を通つて三日間ばかり行くと、香港といふ英國領の島に着きます。こゝは全くのヨーロッパ風で、市街が、小さな、そして高い山を中央にして、島を取巻いて建つてゐます。美しい立派な廣い路が島の周圍を繞り、次第に山の中腹まで繞り繞つて登つて行きますが、山の頂までは、外國人は何人でも登ることは許されません。なぜならば、この島はイギリスの東洋での大切な商業の港である



香港

と同時に、大切な要塞砲臺のある處で、その要塞の設備を外國人が見てはならないからです。

この島にも、日本人はなかなか澤山商業をやつてゐます。會社の代理店などはいくつもあります。香港の市街の美しさは夜です。そして、それは港に碇泊してゐる船から眺めやつた景色です。海

岸より山の中腹までだんく高くなつてゐる家屋のあらゆる窓から電燈が輝いて、ちやうど大きな蜂の巢の一つ一つの孔に燈火をつけたやうです。そして港の中を通ふ小蒸氣は花電車のやうに美しく飾つて、あちこち走り廻つてゐます。香港まで來ると、いかにも洋行したやうな氣になります。

シンガポール

ore
「新嘉坡」

Singapore
の部 細亞の東南
港市 海峡植民地

S
の港市

英領

英領

棕櫚の花咲く

椰子の實みの

共に池邊義象

一世界一遇

中の句

香港から先はシンガポールといふ港です。「棕櫚の花咲くシンガポール」と皆さんが歌ふその港です。こゝはもう熱帯で、地面から、空中から、暑さがどつと人の身體を包みます。船からおりて市街を通ると、強い花の香やら、水菓子屋の前で嗅ぐやうな果實の香氣やらが鼻をうちます。こゝの公

セーロン

Ceylon
英領印度洋中の一島

園へ行くと、眞紅な幹をした檳榔樹が眞青な葉をして立つてゐます。又六七寸もある金色や青色のとかげが草の上に眠つてゐます。そして木の枝には栗鼠がかさ／＼と木の葉を動かして飛んでゐます。そして水の面には紫色の睡蓮がぼつ／＼咲いて、夢でも見てゐるやうです。眞晝頃になると、しんとして物音一つも聞えませんが、さういふやうな強い光の香が空中に漂つてゐるばかりです。全く異なつた國へ來たといふ心持がします。

それから先の港は、椰子の實みのるセーロン島です。皆さんは椰子の實といふものが樹になつてゐるのを見たことがありませんか。大きな猿の頭のやうな形をしたのが、幾

ナイフ
Knife



新嘉坡

つも幾つも、高い櫓の上になつて、いかにも重さうに見える。その外皮をむいて、また真中から二つに割つて、中の眞白な實をナイフでそいで、生で食べたり、煮て食べたりします。生栗を食べるやうな味のするものです。船の上から見ると、この邊の海岸は、ちやうど日本の海岸が松の林で覆はれてゐるやうに、どこまでも椰子の木で覆はれてゐるのです。そして

船が港に着くと、どこからともなく、眞黒の子供が小船に乗つたり泳いだりして、その船の周圍に集つて來ます。ちやうど眞黒の大きな魚の群のやうです。これが何か面白いひながら、水を潛つたり、浮上つたりして船のあたりを騒ぎまはります。これは乗客から錢を貰ひに來たのです。そして銀貨を投げてやると、すばやく小船の中から飛込んで、銀貨の水中に沈んで行くよりも早くその下へ廻つて、巧に受止めるのです。その巧なこと、どんなに遠くへ投げて、また船の眞下へ投げて、一つとして受損ずるやうなことはありません。水中でも、水の表面でも、自由自在に飛びまはり泳ぎまはるには驚かされます。

地中海
歐羅巴と亞弗利
加との間に
ある

喜望峰
Cape of
Good Hope
の南端に
近き岬

セーロン島を出た船は、普通ならば印度洋を横切つて、紅海を通つて、地中海へ出るのですが、私の乗つた船は、戦争最中で地中海が危険だといふので、印度洋を南へくと下つて赤道を越えて、アフリカの南の端の喜望峰といふ處へ向つたのです。

地圖を抜いて御覽なさい。セーロン島から喜望峰までは随分長い間です。船はちやうど十七八晝夜、山も陸地も見えぬ水の上、いくら四方を眺めても何一つ見えぬ大洋の上を走つて行つたのです。

ところが、船が赤道を越える前後に、無風帶といつて、年中風の少しもない處があるのです。我々の地球の表面の眞中

を帶のやうに取巻いてゐる一帯がそれです。そこは鏡の面のやうに平かで、どつちを見ても小波一つ起りません。たゞ船脚に碎ける波が、深い眠から覺めて驚くやうに、少しばかり騒ぐだけです。眞青な水、目が眩むやうな日の出、一片の雲もない大空、まんまるく四方を取圍んだ水平線。我の船は今やこれらの眞中にゐるのです。そしてその船から立上る煙は眞直に立つて、少しも亂れません。太陽は帆柱の眞上から光を放ち、ちやうど鏡張の室の中へでも身を入れてゐるやうに四方に照渡つて、實にさわやかな氣持です。

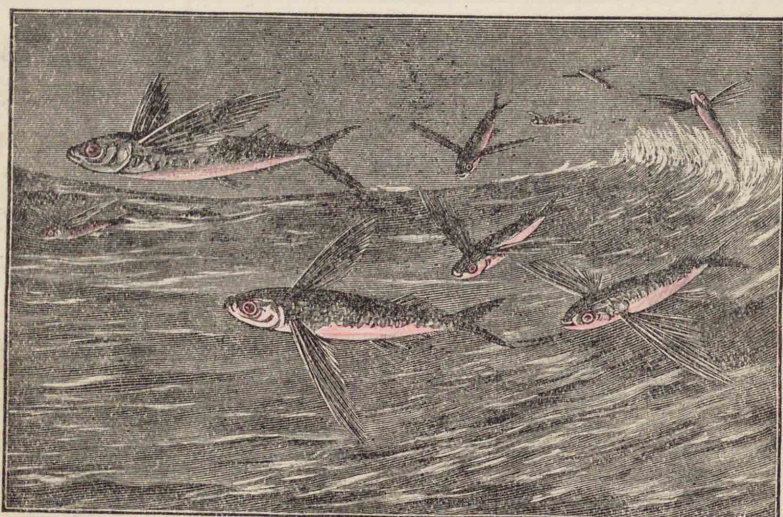
けれど、廣いく大洋の眞只中に、生きて動いてゐるものと

スクリュー
螺旋式推進機
Screw
暗車

暗車

ては何もありません、又何の音も聞えませんが、我々の船ばかりです、我々の船のスクリューが立てる音ばかりです。かやうに静かな眠の國を一日か二日か航行して御覽なさい。明るいけれど、何ともいはいられない寂しさのあるものです。

そんな時に、波の上を不意に掠めて飛んで行くものがあるのを思つて御覽なさい。何でせう。銀色をした小さな魚が列をつくつて、縦に横に波の上を舞つて行くのです。小鳥ぐらゐの大きさに見えますが、實際はそれより大きいに違ないのです。飛魚です。今まで油のやうに淀んでゐた眠の海、死の海の中へ不意に大きな船がはいつて來て、不思議



トビノウの飛翔

議な姿をして波を切つて行くので、びつくりして俄かに波の中から飛立つたのでせう。一列になつて十も二十も飛んで行くのがあるかと思ふと、横に並んで競争するかのやうに、後からくと飛出すものがあります。その銀色にきらきらと光るさまは實に一大壯觀で、目もくるめか

んばかりです。

これが波に咲く花です。そして、これこそは此の無風帯に於けるたゞ一つの波の戯です。たゞ一つの生きたものゝ姿です。

船がこの無風帯を出抜けると、波がそろ／＼高くなつて來ます。今まで滑るやうにしてゐた大きな船體が搖れはじめます。波の大きな頭が遠くから眞青になつて起つて來ると、いつの間にかその波頭は船の底へ潛り入つて、船を持ち上げます。船は思はず前後によろめき、船底のスクリュ－はさも苦しげに音を立て、忙しく回轉します。けれどもこれぐらゐはまだ何でもありません。船が次第々々に日

大類仲

歴史家

文學博士

東北帝國大學教

授

東京市生

ヴェニス

Venice

ボ

イ太利北部の

Po. 川

アルプス山中

に發し東流し

てアドリヤ海

に入る

を重ねてアフリカの岸近く寄つて行きますと潮の流が急になり、船の動搖が一層烈しくなつて來ます。さうすると、どこから出て來たのか知れないが、眞白な大きな信天翁といふ海鳥が、船の上を、また船の周圍を包んで飛びまはります。(趣味の紀行文)

三三 水の都

大類仲

ヴェニスは伊太利の有名な都市であつて、風景の美を以て世界に喧傳された水の都である。

此の都は北伊太利の沿岸で、ポーの河口に近い地點にある。街は大きな潟の内にある島であつて、陸とは全く離れて居

リヤルト
Rialto

り、又海に向つては長く斗出した海峡によつて限られて居る。陸からも海からも攻めにくい要塞地で、潟の内は安全な一箇の城郭の様なものだ。街は其の潟の中央なるリヤルトの島に置かれてゐる。中世の始め、幾多の蠻族が伊太利を荒した時、人民の或者は逃れて此の險要な潟に據つて、こゝで漁業を營むことになつた。これがヴェニス草分けである。此の地は軍事上險要な地であつたばかりでなく、其の潟は少なからぬ漁鹽の利を藏してゐた。ヴェニスの住民がおひくゝ發達した其の資源は此等の利に依つて得たものである。そのみでなく、歐洲内地と東方諸國との交通の要路に當つてゐたので、遂には中世第一の商業市



ラ ド ソ ゴ と ス ニ エ ヴ

といはれるばかりの盛況を呈するに至つた。ヴェニスの發達は全く水の賜である。水あればこそ陸からも攻められずに安全な生活を營むことが出来、水あればこそ漁鹽の利を收めることが出来、水あればこそ更に四方に航海通商を試みる事が出来たのだ。その美しい風景も亦全く水の賜に